

# 高齢者の生活機能の理解を深める演習プログラムの学習効果

## ～排泄援助の自作動画と学習形態の組み合わせの試み～

切明 美保子      溝江 弓恵

### 要 旨

高齢者の排泄を生活機能から理解しやすいように工夫した演習プログラムの学習効果を明らかにし、今後の教育への示唆を得る目的で、A大学看護学科2年生59名に、90分の演習を実施した。演習では、学生に自作動画を視聴してもらい、高齢者の排泄機能の情報収集・アセスメント・看護目標の設定・看護計画立案について個人ワークとグループワークを実施した。演習後、看護過程と演習全体に関する自己評価アンケートを実施した。アンケート回収は48名(回収率81.4%)であり、自己評価12項目の単純集計と自由記述内容のカテゴリ化から学習効果や動画視聴の有効性を検討した。学生は、演習プログラムを通して高齢者の背景や生活・心理面への影響を考える複雑さを感じていたが、グループワークにより高齢者の排泄機能の理解を深めていた。そして、看護過程においてアセスメントが援助に直結していると実感できたことが、学生の生活機能のアセスメントへの興味や演習の満足度につながっていた。また、自作の排泄援助場面の動画は、事例のイメージ化を助け、出演している先輩学生の様子を自己の将来像として理解していた。先輩学生出演する自作動画視聴とアセスメントのグループ検討は、高齢者の排泄機能のアセスメントへの興味を高めることに効果があったと考える。

キーワード：高齢者 排泄援助 看護学生 演習プログラム

### 1. 緒言

高齢化や核家族化に伴い、若者が高齢者と接する機会が少なく、高齢者を理解するには困難が多い。将来看護師になる看護学生は、高齢者のニーズを適切にとらえて看護を実践することを期待されている。そのためには、多様な価値観を持つ高齢者を多角的にアセスメントできる力を持ち、生活者として理解することが望まれる。高齢者の日常生活の援助においては、高齢者の生活機能の視点から援助の必要性を考えることが大切であり、学習した知識を対象に合わせて適応させていくためには、講義・演習・実習と発展させていく必要がある。高齢者にとって排泄の自立は社会生活の維持や自尊心の維持に必要なことである<sup>1)</sup>。加齢の変化に伴い、運動機能や認知機能の低下によって起こる排泄の失敗や排泄行為の介助は、場合によっては高齢者に恥辱や自己嫌悪をもたらすことになる。看護実習では、看護学生が高齢者を理解するには、記録物や高齢者とのコミュニケーションを通して情報収集が行われる。しかし、排泄援助は通常個室で行われるため、日常生活援助の中でもケアに関する知識の共有が困難であるとともに、高齢者自身の認識や羞恥心などからニーズが伝わりにくいなど、情報の収集や分析したりすることが難しい部分といえる。そこで、演習をすることで少しでも高齢者の生活機能に興味を持ってもらい、演習後に予定している事例の看護過程演習につなげていきたいと考える。

そこで、本研究の目的は、高齢者の排泄を生活機能の視点から理解しやすいように視聴覚教材

や個人ワークとグループワークを組み合わせた演習プログラムを実施・評価し、今後の演習や実習への教育の示唆を得ることとする。

## II. 方法

### 1. 研究対象

研究対象は、A 大学看護学科 2 年生で、高齢者看護援助論を履修中の学生 59 名のうち、協力が得られた 48 名 (81.4%) の演習の自己評価アンケートである。

### 2. データ収集期間と方法

調査期間は、2022 年 9 月である。

演習後、学生に自己評価アンケートを実施した。

アンケート内容は、看護過程に関する 6 項目 (情報収集 1 項目：排泄機能のアセスメントに必要な情報を収集できた、アセスメント 3 項目：情報を関連付けた排泄機能のアセスメントができた、現存能力に着目できた、わかりやすく根拠を説明できた、看護目標の設定 1 項目：アセスメントに基づいて看護目標を検討できた、看護計画の立案 1 項目：看護目標達成のための看護計画を具体的に立案できた)、演習全体の振り返りに関する 6 項目 (学習への興味・関心：演習を通じて高齢者の生活機能のアセスメントに興味を持てた、自作動画のイメージ化の効果：動画を通じて高齢者の排泄援助場面をイメージできた、学習の困難感：今回の演習は難しかった、自信：演習を通じて自分の高齢者のアセスメント能力が向上した、満足度：演習内容に満足した、学習意欲・教材効果：このような演習を今後も行いたい)、計 12 項目とした。自己評価は、非常にそう思う (4 点)、そう思う (3 点)、そう思わない (2 点)、全くそう思わない (1 点) の 4 段階評価で回答を求めた。また、演習についての感想・意見と、動画についての感想・意見を自由記述で求めた。

### 3. 分析方法

自己評価アンケートの看護過程と演習全体の振り返りに関しては、単純集計を行った。感想・意見の自由記述に関しては、文脈を踏まえて意味内容に基づきコード化し、内容の類似性によりカテゴリ化した。

### 4. 演習概要

#### 1) 演習の位置づけ

高齢者看護援助論 (2 単位) は 2 年次後期に、高齢者の生活機能を整える看護、高齢者に多くみられる症状や疾患の看護、認知症の看護、看護過程演習で構成されている。今回の演習は、高齢者の生活機能を整える看護の最終回 (10 回目) に実施した。

2 年生は、1 年次前期に病院や看護師の役割理解の目的で基礎看護学実習 I を、2 年次前期で看護過程論の講義を終了している。

#### 2) 演習目的

演習目的は、以下の 4 つである。

- (1) 高齢者の排泄アセスメント (特に排便機能) に必要な情報を述べることができる
- (2) 高齢者の排泄援助の介入の必要性について述べるができる

- (3) 高齢者の排泄援助についての方針を述べることができる
- (4) 看護目標達成のための具体的な計画を立てることができる

### 3) 演習方法

#### (1) 演習事例について

高齢者の生活機能を意識しやすいように運動器の障害の影響による便秘の事例とし、日常生活の様子と背景因子などを加え設定した。(表1)

【事例】A氏, 75歳女性, 元教員。右膝の疼痛・熱感により歩行困難のため入院した。現在, 身の回りのことは自分でできているが, 車椅子を使用し移動している。入院後にトイレが間に合わず失禁したことがあった。最近食事や水分の摂取量が減少している。高血圧症のため内服治療中である。認知機能低下は見られない。入院前は, 子供に迷惑かけたくないという一人暮らしで暮らしていた。

表1 事例

<p>【事例】</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・美保野 幸子さん, 75歳, 女性, 高血圧症で内服治療中。</li><li>・右膝に疼痛と熱感があり, 歩行困難になり1週間前に入院した。薬物療法を実施し, 現在は体重をかけた膝を曲げると痛いので, 移動は車椅子を使用している。身の回りのことは自分でできている。</li><li>・食事は, 毎食5割程度摂取, 食事についてくる飲み物は残していることが多い。下膳時に声をかけると, 「料理が好きなのよ。家ではご飯は少なめにしているけど, おかずは毎食4品は作って食べていたのよね。病院の食事と同じぐらいの量だったわ。病院は大量に作るから味がちょっとね。頑張って食べてもこれぐらいなのよ。入院してからはいつも同じくらいよ。」と話していた。</li><li>・排泄について尋ねると, 「昨日は, 排尿4回, 毎日同じ回数ね。便はないです, 2~3日に1回でてるかな, 便が出にくくて時間がかかるのよ」と話していたが, その後トイレに行くのに間に合わず尿を漏らしてしまった時に, 「こんな後始末をさせて申し訳ない。」と話していた。</li><li>・検温時には, 「定年まで中学の家庭科の教員をしてから, 塾の先生を70歳まで頑張ったのよ。独り暮らしで誰もいないから一人で何でもしていたわ。子供には子供の生活があるから迷惑をかけたくないから頑張っているのよ」と話していた。</li></ul>
---

#### (2) 自作動画について

学生が能動的に考えられるように実習場面を想定し, 午前中のバイタルサイン測定と排泄援助の場面とし, 10分間のシナリオを作成し撮影した。映像には事例の紙上情報に, 同室者との関係, 入院前の生活状況の情報を追加した。また, すでに実習が終了している4年生に患者役と看護師役を依頼し, 患者役には高齢者のイメージに近づくようかつらや寝巻などを着用してもらった。排泄物に関しては, 絵で表示した。

#### (3) 演習内容について

演習は, 90分で実施し, 最後に自己評価アンケートを実施した。(表2)

事前課題は, 高齢者の排泄機能について学習の再確認と事例の理解を目的に, 演習の前週に事例を提示し, ①高齢者の排泄機能に関する特徴, ②疾患や治療で注意を要すること, ③現在の排泄状況は望ましい状態であるか, 排泄状況に影響を与えている因子は何か, ④排泄状況が生活や気持ちにどのような影響を与えているか, について考えることを課題とした。

演習内容は, 最初に自作動画を視聴し, 学生各自でアセスメントを書き出す個人ワークを実

施した後に、4人グループになり個人ワークしたアセスメントの共有と看護目標・看護計画の検討をグループワークした。その後、代表する2～3のグループのアセスメント・看護目標・看護計画を発表し、質疑応答を行った。

教員は、個人ワークとグループワーク中は巡回し、進捗状況の確認と意見交換やアセスメントが深まるように支援した。またグループ発表後に助言を行った。

表 2 演習のプログラム

演 習 プ ロ グ ラ ム		時間
1. 導入	・演習方法の説明, 事前課題の返却, 演習記録用紙配布	3分
2. 動画視聴	・自作動画の視聴	10分
3. 個人ワーク	・各自で事例のアセスメント	20分
4. グループワーク	・各自のアセスメントを共有後、看護目標と看護計画立案	25分
5. 発表とまとめ	・2～3つのグループの発表(書画カメラ使用), 質疑応答 ・教員からの助言	25分
	・演習記録の記載, 自己評価アンケート	7分

### 5. 倫理的配慮

調査協力については、対象学生に研究の趣旨や方法、匿名性の保持、自由意思の尊重、データの管理、公表について、協力の有無は成績に全く関係しないこと、協力の同意をした場合でもデータ集計前であればいつでも撤回できることを、口頭と紙面で説明し書面で同意を得た。

また、動画に出演する学生に対して、研究の趣旨や方法、匿名性の保持、自由意思の尊重、データの管理、公表について、協力の有無は成績に全く関係しないことを説明し、書面で同意を得た。

本研究は、八戸学院大学・八戸学院大学短期大学部研究倫理委員会の承認を得て実施した(承認番号 22-4)。

## III. 結果

### 1. 演習に関する自己評価アンケートの結果

学生の自己評価アンケートの結果は、表3のとおりである。

#### 1) 看護過程についての自己評価

看護過程についての自己評価アンケート6項目の平均値は3.26点であった。項目別にみると「情報収集：排泄機能のアセスメントに必要な情報を収集できた」3.46点が最も高く、「アセスメント：情報を関連付けた排泄機能のアセスメントができた」が3.21点、「アセスメント：現存能力に着目できた」が3.27点、「アセスメント：分かりやすく根拠を説明できた(原因や要因、生活への影響、成り行き、看護介入の必要性・援助の方向性などの要素が記載されているか)」が3.06点、「アセスメントに基づいて看護目標を検討できた」が3.35点、「看護目標達成のための看護計画を具体的に立案できた」が3.21点であった。アセスメントに関する「現存能力に着目できた」「情報を関連付けた排泄機能のアセスメントができた」「分かりやすく根拠を説明できた(原因や要因、生活への影響、成り行き、看護介入の必要性・援助の方向性などの要素が記載されているか)」の3項目の平均値は3.18点であった。

看護過程についての自己評価は、情報収集1項目・アセスメント3項目・看護目標の設定1項目・看護計画立案1項目のすべての項目が3.0点以上であった。

表3 演習に関する自己評価アンケートの集計結果

評価項目		平均点
看護過程	1 情報収集：排泄機能のアセスメントに必要な情報を収集できた	3.46
	2 アセスメント：情報を関連付けた排泄機能のアセスメントができた	3.21
	3 アセスメント：現存能力に着目できた	3.27
	4 アセスメント：分かりやすく根拠を説明できた (原因や要因、生活への影響、成り行き、看護介入の必要性・援助の方向性などの要素が記載されているか)	3.06
	5 アセスメントに基づいて看護目標を検討できた	3.35
	6 看護目標達成のための看護計画を具体的に立案できた	3.21
演習全体の振り返り	1 今回の演習を通じて、高齢者の生活機能のアセスメントに興味を持てた	3.58
	2 動画を通じて、高齢者の排泄援助の場면을イメージすることができた	3.79
	3 今回の演習内容は難しかった	2.62
	4 今回の演習を通じて、自分の高齢者のアセスメント能力が向上した	3.19
	5 今回の演習内容に満足した	3.50
	6 このような演習を今後も行いたい	3.56

## 2) 演習全体の振り返りの自己評価

演習全体の振り返りの自己評価6項目の平均値は、3.37点であった。項目別にみると学習への興味・関心を問う「今回の演習を通じて、高齢者の生活機能のアセスメントに興味を持てた」が3.58点、自作動画のイメージ化の効果を問う「動画を通じて、高齢者の排泄援助の場면을イメージすることができた」が3.79点、演習の満足度を問う「今回の演習内容に満足した」が3.50点、学習意欲・教材効果を問う「このような演習を今後も行いたい」が3.56点、自信を問う「今回の演習を通じて、自分の高齢者のアセスメント能力が向上した」が3.19点、学習の困難感を問う「今回の演習内容は難しかった」が2.62点であった。

## 3) 演習についての感想・意見（自由記述）

演習についての感想・意見は、63コードあり、内容の類似性により分類した結果、5つのカテゴリに分類された(表4)。以下、コードを<>、カテゴリを【 】で示す。

一番多く分類されたカテゴリは、【背景や症状が複雑なので学習が必要・大変だった】の26件であった。内容は、<高齢者の特徴・今までの生活などを合わせて考えることが難しかった><排泄だけでなく既往歴も関係していて、援助方法を考えるのが少し大変だった><アセスメントは結構できるようになったが、どのような援助につなげるのかが時間がかかったので、知識を身につけて、すぐに援助方法が思いつくようにしたい><排泄には身体的要因と環境的要因が大きく関わっていると思い、その面を重点に計画を立案していたが、入院によるストレスや遠慮などの心理的要因も関わることを理解した>などで、高齢者の背景や症状など複雑で、理解が大変というものがある一方で、高齢者の背景や生活・心理面への影響を考える複雑さを理解した

><納得した>や<知識を身につけたい>や<援助を考えられるようになりたい>などの記述も多くみられた。

【グループで話し合うことで理解が深まった】は、<便秘は自分でも思いついたが姿勢の保持能力や羞恥心、血圧の変化による身体に起きることは一人では出なかったため、新しい考察ができて楽しかった><グループワークを行い、自分の視点や知識だけでは見えていなかった高齢者

表 4 演習の感想・意見の記述内容 (抜粋)

カテゴリ	記述内容 (抜粋)	記述数
背景や症状が複雑なので学習が必要・大変だった	<ul style="list-style-type: none"> <li>・私たちは排泄しなくなったら声をかけてほしい、そのためにどう援助をするかを考えていたが、生活行動と合わせて排泄に誘導することをすれば自然であることを学び、とても納得した。</li> <li>・高齢者の排泄機能と正常人の排泄機能には差があることで排泄パターンに違いが見られた。また、患者は看護師にトイレの介助を行うことに対して羞恥心が感じられることから、お互いの信頼関係を築くことも大切だと感じた。</li> <li>・排泄には身体的要因と環境的要因が大きく関わっていると思い、その面を重点に計画を立案していたが、入院によるストレスや遠慮などの心理的要因も関わることを理解した。</li> <li>・加齢や個人因子によってどのような障害が起こるかをいろいろ関連つけて考えることができた。今の疾患だけでなくこれからの行動と結び付けて、今後どのようなことが予測されるか具体的に考えることができ、能力が向上したかなと思う。</li> <li>・高齢者の特徴・今までの生活などを合わせて考えることが難しかった。情報を統合し、なぜこう考えたかの根拠を出すまでに、事例に書いてあることから患者の気持ちを考え、今後どうすべきかを書き出すことが大切だと感じた。看護目標を達成するための具体的な援助も考える力をつけていけばいいと今回の演習で分かった。</li> <li>・機能低下がありアセスメントするときに注意すべき情報が様々あるため、アセスメントが、日々の生活・入院前の生活などと比較し、現存能力、介助が必要な能力を見分け、適切に援助ができるようにしたい。</li> <li>・グループで事例をアセスメントし看護計画を立てる中で患者が現在どういう状況か、それにどんなことが影響しているかを考え頭の中で関連図をイメージしているようだった。アセスメントは結構できるようになったが、どのような援助につなげるのかが時間がかかったので、知識を身につけて、すぐに援助方法が思いつくようにしたい。</li> <li>・着眼点はよかったと思うが、それを文にできなかった。薬の副作用まで考えることができなかった。しかし話し合うことはできたし、いろいろな意見を出して考えることができた。今度はもう少しスムーズに意見を出し合って話し合いたい。</li> <li>・排泄だけでなく既往歴も関係していて、援助方法を考えるのが少し大変だった。</li> <li>・高齢者の排泄のアセスメントについて考えが足りない部分があったと感じた。演習を通じてどのようなアセスメントをすればいいかわかった。身体機能の特徴と患者の気持ちの理解ができるようにしたい。</li> </ul>	26
グループで話し合うことで理解が深まった	<ul style="list-style-type: none"> <li>・便秘は自分でも思いついたが姿勢の保持能力や羞恥心、血圧の変化による身体に起きることは一人では出なかったため、新しい考察ができて楽しかった。</li> <li>・グループで話し合う中で、自分では考えていなかった問題に気づくことができた。話し合う時間がもう少し欲しかった。</li> <li>・具体的な援助を考えた時に自分のグループではこれだけと思っていたが、他のグループの発表を聞いて、それぞれ違う援助や考え方があってすごいと思った。自分自身援助を考えるとときに視野を狭くしてたんじゃないかと感じた。</li> <li>・みんなで協力してやること、自分が思いつかなかったことがたくさん挙がって考えを深めることができた。</li> <li>・グループで共有することで様々な視点から考えることができて良かった。排泄について、今まであまり考えてなかったが、排泄がうまくできなかつたり失禁してしまうと患者は苦痛であることがわかって良かった。</li> <li>・グループワークを行い、自分の視点や知識だけでは見えていなかった高齢者への援助が解ったと感じた。また、自分の知識・思考だけではまだまだ不十分であると感じ、周りの意見や知識を吸収しながら自分の視野を広げていきたい。</li> <li>・時間が少なかった。しかし、グループメンバーとたくさん意見交換ができてよかった。</li> </ul>	18
一連に実施できて深く考えながらできた	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高齢者の排泄機能について事例から問題点や原因、看護目標、援助を考えることができ、理解が深まった。今回自分になかった意見や考えを今後アセスメントに取り入れて援助していけるようになりたい。</li> <li>・排泄機能のアセスメントをする際、排泄において何が問題でどのような症状が問題とかかかわっているのか考え、援助内容を具体的に提示することができたと思う。</li> <li>・一連の流れで看護が進んでいくのが実感できた。改めて看護過程の展開は、ちゃんとした理解が必要だと思った。</li> <li>・今日の演習で高齢者の特徴や便秘の患者さんに対してのアセスメント能力が向上したと思う。またどのようなことに着目して看護問題になりそうなることを頭で考えながら情報収集できた。</li> <li>・情報を収集し、アセスメント、患者の能力や尊厳について着目しつつ、意見を出し合って良い計画が立案できた。良い経験になった。</li> <li>・高齢者の排泄機能についてよく考え、自分が援助するとしたらと考えながら、問題提起、援助方法を考えることができてよかった。</li> <li>・あまり時間がなかったけど、患者に合わせた援助を考えることができた。</li> <li>・患者が今できる最大限の力を引き出した援助を考えられた。高齢の患者のADLは看護師の援助しだけで大きく変化すると感じた。手取り足取りではなく、やってみようの気持ちを持たせる声掛けがしたい。</li> </ul>	13
事例をイメージしやすかった	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高齢者の便の性状など、なかなか動画にしばらくのところを絵で表現するなど工夫されていて本格的だと思った。実施に便の性状を見てアセスメントすることがなかったのも、イメージをつかめた。</li> <li>・文章だけでなく動画もありイメージしやすかった。もともと患者に便秘があったのかどうかの情報も加わり、より根拠やアセスメント、具体的援助を考える上で重要であると理解した。</li> <li>・具体的な事例を用いることで実際の患者像を詳しく想像することができた。</li> </ul>	5
課題を活用できた	<ul style="list-style-type: none"> <li>・課題があったおかげでそれぞれが調べてきたため、多少知識もあり、話し合いがとてもスムーズだったように感じる。</li> </ul>	1

への援助が解ったと感じた。また、自分の知識・思考だけではまだまだ不十分であると感じ、周りの意見や知識を吸収しながらも自分の視野を広げていきたい<みんなで協力してやること、自分が思いつかなかったことがたくさん挙がって考えを深めることができた>などが18件あった。

【一連に実施できて深く考えながらできた】は、<高齢者の排泄機能について事例から問題点や原因、看護目標、援助を考えることができ、理解が深まった><一連の流れで看護が進んでいくのが実感できた。改めて看護過程の展開は、ちゃんとした理解が必要だと思った><患者が今できる最大限の力を引き出した援助を考えられた。高齢の患者のADLは看護師の援助しだいで大きく変化すると感じた。手取り足取りではなく、やってみようの気持ちを持たせる声掛けがしたい>など、13件から抽出した。

【事例をイメージしやすかった】は、<文章だけよりも動画がありイメージしやすかった。もともと患者に便秘があったのかどうかの情報も加わり、より根拠やアセスメント、具体的援助を考える上で重要であると理解した><具体的な事例を用いることで実際の患者像を詳しく想像することができた><高齢者の便の性状など、なかなか動画にしづらいところを絵で表現するなど工夫されていて本格的だと思った。実施に便の性状を見てアセスメントすることがなかったの、イメージをつかめた>などの5件から抽出された。

【課題を活用できた】は、<課題があったおかげでそれぞれが調べてきたため、多少知識もあり、話し合いがとてもスムーズだったように感じる>の1件であった。

#### 4) 自作動画についての感想・意見

自作動画についての感想・意見は46コードあり、内容の類似性により分類した結果、【イメージしやすかった】40件と【勉強になった】16件の2つのカテゴリに分類された。(表5)

【イメージしやすかった】の記載内容は、<いつも文章でイメージがわかなくなったり逆に想像しすぎて混乱することが多かったが、日常生活がDVDにあり、援助内容を立案しやすかった>

表5 動画についての感想・意見の記述内容(抜粋)

カテゴリ	記述内容(抜粋)	n=56 記述数
イメージしやすかった	<ul style="list-style-type: none"> <li>・いつも文章でイメージがわかなくなったり逆に想像しすぎて混乱することが多かったが、日常生活がDVDにあり、援助内容を立案しやすかった。</li> <li>・演技が上手でわかりやすかった。</li> <li>・援助時声掛けがわかりやすくイメージしやすかった。</li> <li>・患者・看護役ともに特徴をつかめておりわかりやすかった。</li> <li>・患者役の口調がリアルでイメージしやすかった。</li> <li>・教科書の文字だけでは想像つかなかった高齢者の特徴が動画を見て分かった。</li> <li>・高齢者への援助がとてもイメージしやすかった。</li> <li>・実際の場面を見ているようでとてもわかりやすかった。援助を考える上で参考になった。</li> <li>・わかりやすいし、すごくリアルな感じで自分がやっているかのように想像できた。</li> <li>・わかりやすい動画でどちらの役もリアリティがあって病院もこんな感じなんだと想像がついた。</li> <li>・とても細かいところまで再現されていてわかりやすかった。</li> </ul>	40
勉強になった	<ul style="list-style-type: none"> <li>・声掛けが自然で勉強になった。</li> <li>・看護師としての声掛けや行動、車いすの扱いなど一つ一つの動作から自分もこのように援助しなければならぬ参考にしたと感じた。</li> <li>・患者を演じるのが上手だった。声掛けをたくさんして私も見習おうと思った。</li> <li>・看護師の援助の中の声掛けや患者の受け答えの仕方なども参考になる場面がありよかった。</li> <li>・患者・看護師役が思えないほどスムーズな援助やコミュニケーションで声掛けの仕方を学ぶことができた。</li> <li>・患者役が「恥ずかしいから大きな声で言わないで」というのを聞いたとき私も患者に接するときはプライバシーを守って話したいと思った。</li> <li>・高齢者の介助方法の参考になりとても勉強になった。</li> <li>・声のかけ方、援助の仕方、目線などが明らかに私たちと比べてすごかったので4年生になる頃には私たちも成長していきたい。</li> </ul>	16

<実際の場面を見ているようでとてもわかりやすかった。援助を考える上で参考になった><わかりやすいし、すごくリアルな感じで自分がやっているかのように想像できた>などがあつた。また、【勉強になった】の記載内容は、<看護師としての声掛けや行動、車いすの扱いなど一つ一つの動作から自分もこのように援助しなければならない参考にしたいと感じた><看護師の援助の中の声掛けや患者の受け答えの仕方なども参考になる場面がありよかった><声のかけ方、援助の仕方、目線などが明らかに私たちと比べてすごかったので4年生になる頃には私たちも成長していきたい>などがあつた。

#### IV. 考察

##### 1. 看護過程の理解に対する演習プログラムの評価

自己評価アンケートの看護過程の自己評価の平均値が3.0点以上であり、学生は演習の事例の看護過程について「概ねできた」と評価していた。

高齢者を対象とする看護過程では、高齢者の持つ疾患や既往や、加齢に伴う機能の低下などの衰退する要素だけにとらわれるのではなく、高齢者の生活史をもとにしながら高齢者の望む生活に着目し、持てる力等のポジティブな部分を引き出す目標志向型思考で展開することが求められる。また、高齢者は加齢や疾患が影響し生活習慣やライフスタイルへの影響は高齢になるに従って大きくなるため、身体的、心理・社会的状況を多方面から包括的に情報収集し、アセスメントすることが求められる。斎藤は<sup>2)</sup>看護学生のアセスメントにおける困難について、膨大な量の情報の中から必要な情報を探し出すことや収集した情報の分析・解釈が難しいと述べている。今回の演習の情報の分析・解釈でも、複数の情報から知識と組み合わせて推論することが求められる部分があり、複数の情報を基に推論することや既存の知識の活用に時間がかかることから【背景や症状が複雑なので学習が必要・大変だった】という反応が多かったと考える。しかし、学生の<理解した><納得した>などの反応や【グループで話し合うことで理解が深まった】などの反応から、学生は知識の不足や気づけなかった部分はあつたが、グループ討議することで新たな発見や気づきがあり理解が進んだと感じていると考える。また、演習の最後に2~3つのグループの発表・質疑応答から、所属グループのアセスメントや看護計画が確認できたことで、自信につながっていたのではないかと推測する。

事前学習により事例の疾患や高齢者の排泄機能の知識の確認、情報で気になることに注目するよう課題としたことや自作動画を活用したことは、演習を進める上で効果があつたと考える。

##### 2. 教材と学習形態を工夫した演習プログラムの有効性

今回の演習は、高齢者の排泄を生活機能から理解しやすいように、教材（自作動画）と個人ワーク・グループワーク・発表の学習形態を工夫し実施した。

演習全体の自己評価アンケートの結果では、学習への興味・関心、自作動画のイメージ化の効果、自信、満足度、学習意欲・教材効果は3.0点以上であり、効果があつたと考える。

自作動画については、自己評価アンケートや演習や動画の感想・意見から、事例のイメージ化に効果があつたと考える。動画に取り上げる場面について兼松<sup>3)</sup>は、日常生活援助場面の動画が学生にとって既習知識であることから、紙上事例でイメージできていなかった部分を日常生活場面から患者像をとらえ情報の分析に役立てられ、学生にとって患者に提供する看護介入としてもイメージしやすいと述べおり、今回の動画についての学生の反応も同じ傾向であつた。また、



中村ら<sup>4)</sup>は、上級生が下級生のグループワークに入る演習方法について、下級生は上級生に近い将来モデルととらえ意欲を持つきっかけになっていると述べている。今回は動画ではあったが、先輩学生の高齢者役へのかかわりを視聴することで自己の将来像としており、中村らと同様の傾向と考える。2年生にとっては、看護へのモチベーションが高まることが期待できる。また、4年生は実習の経験をもとに模擬患者を演じることで自己の成長を感じることが体験となるのではないかと考え、今後も臨地実習を終えた4年生に模擬患者役を演じてもらうことを検討したい。

事例のアセスメントのグループ検討について、グループ学習人数は一般に6人が良いといわれるが今回の演習では、事前課題で紙上事例から考えてきた内容に自作動画で情報を追加したため、事前課題で気が付かなかった点を情報交換しながら気づいてほしいと考え、より会話の機会を多く持てるよう4人グループとした。グループワークでは、最初に個人ワーク内容を共有してからアセスメントや看護目標・看護計画を検討したことで、学生自身が他者の意見を聞き、不足を感じながらも新たな発見や学びが広がっていることがうかがえる。しかし、学生の反応のく着眼点は良かったと思うが、それを文にできなかった。(中略)今度はスムーズに意見を出し合っ  
>話し合いたい<や<話し合う時間がもう少し欲しかった>などから、短時間で考えをまとめる・説明することに時間がかかるため、考えていることの言語化への支援や、情報共有や意見交換の時間についての検討が課題として挙げられる。

今回の演習は高齢者の排泄を生活機能から理解できるように、短い時間ではあったが情報収集から看護計画立案までの過程を分断せず一連に実施したことは、学生にとって看護過程の各段階のつながりが見えやすく、情報収集やアセスメントが援助に直結していることを再認識でき実施できたという自信や演習の達成感につながっていたと考える。また、先輩学生の参加する自作動画やアセスメントのグループ検討は、高齢者の排泄機能のアセスメントへの興味を高めることに効果があったと考える。今後は他の生活機能への関心が高まるように工夫していきたい。

## V. 結語

高齢者の排泄を生活機能から理解しやすいように自作動画や個人ワークとグループワークを取り入れた演習プログラムを通して、学生は高齢者の背景や生活・心理面への影響を考えることに複雑さや大変さを感じていたが、排泄機能について情報収集から看護計画立案まで一連に演習し達成感が得られたこと、先輩学生の参加する自作動画やアセスメントのグループ検討は、高齢者の排泄機能のアセスメントへの興味を高めることに効果があったと考える。今後は他の生活機能への関心が高まるように工夫していきたい。

### 【謝辞】

本研究に当たり、ご協力いただきました学生の皆様に心より感謝申し上げます。  
尚、本研究は、学校法人光星学院イノベーションプログラム（基金）の助成を受けたものであり、第43回日本看護科学学会学術集会で示説発表したものに一部に加筆・修正を加えたものである。

付記：本研究に関して開示すべき利益相反状態はない。

引用・参考文献

- 1) 堀内ふき, 諏訪さゆり, 山本恵子監修: ナーシング・グラフィカ老年看護学 2 老年看護実践, P54, メディカ出版, 2023.
- 2) 齋藤雪絵, 野崎真奈美: 看護学生の看護過程におけるアセスメントの現状と困難—臨床推論としての考え方の特徴—, 看護研究, 20(1), 19-30, 2023.
- 3) 兼松由紀子, 平澤園子, 桶田小百合: 看護過程演習における認知症高齢者へのかかわり方に対する動画教材を活用した学習効果, 人間福祉学会誌, 23(2), 61-68, 2024.
- 4) 中村博文, 渡辺尚子: 上級生が下級生のグループワークに入る演習方法の試み精神看護学におけるグループワーク演習を通して, 精神科看護, 32(9), 52-57, 2005.

**執筆者紹介 (所属)**

切明美保子 八戸学院大学 健康医療学部看護学科 准教授  
溝江弓恵 八戸学院大学 健康医療学部看護学科 講師